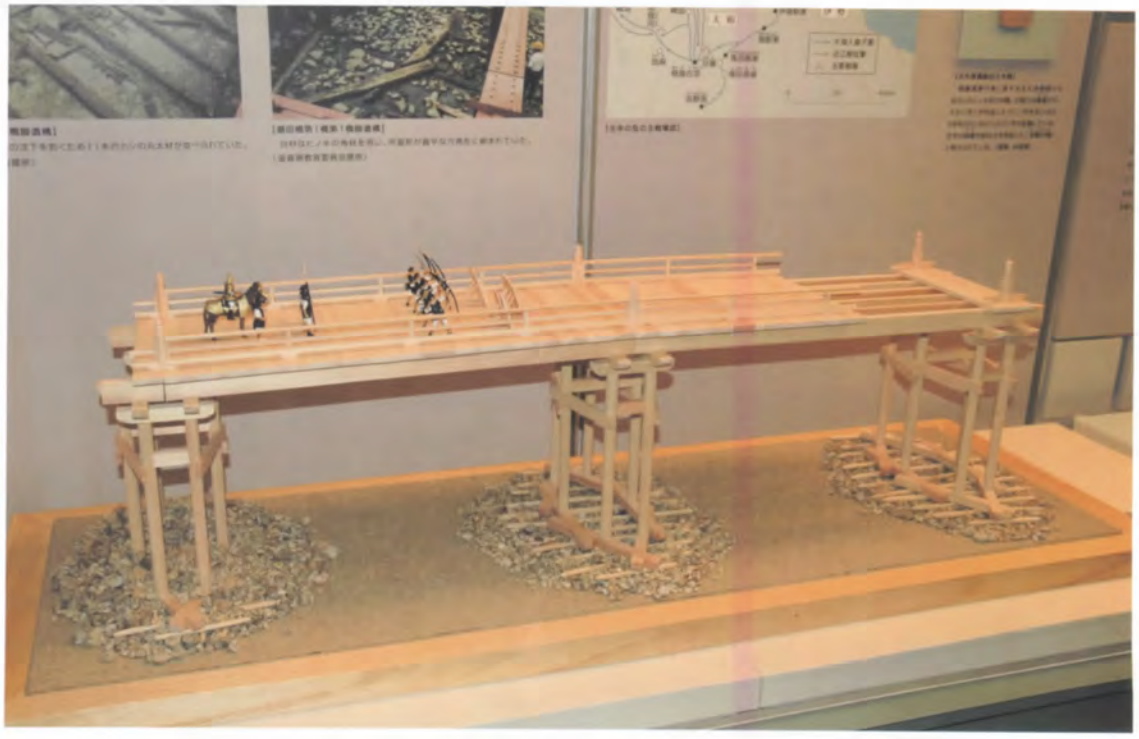
OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津歴博だより

2007
No.67

常設展示室を
リニューアルしました



瀬田橋 35分の1復原模型

大津市歴史博物館

常設展示改装の内容

平成十八年三月の大津市・志賀町合併を契機として、平成二年十月の開館以来、初めて常設展示の大幅な改装を行いました。次に、その主な内容を紹介します。

○展示導入コーナーの新設

常設展示の見方を、ナレーションと静止画像によって約三分間の番組に編集しました。ご観覧の参考にしていただければと思います。

新設展示導入コーナー
手前が展示案内の映像。その向こうに、史跡写真入りの大きな新市域図を設置。

○旧志賀町域の歴史を追加

以前のテーマ展示「諸浦の親郷・堅田（かたた）」を、「堅田と比良（ひら）山麓の村々」とし、旧志賀町域の歴史を紹介するとともに、二階の歴史年表展示においても、随所に関連の資料とグラフィックを挿入しました。

○グラフィックの全面改装

資料展示の理解の補助として、写真や地図、イラストをふんだんに使用（全五五〇点）、より分かりやすい展示を心がけました。また、文字解説が少ないというご意見を反映し、各グラフィックにも丁寧な説明を付けました。

旧志賀町のめずらしい民具
テーマ展示「堅田と比良山麓の村々」に、比良山中で使用された運搬具（トンボ車）を展示。

○大津百町・札（ふだ）の辻模型に解説機器設置

以前より人気の高かった、大津百町・札の辻の町並み模型（三〇分一）を、より楽しくご理解いただくため、町並み模型の細部写真を中心に関連する資料写真などをおりまぜ、パソコンによって検索できるようにしました。町並み模型のみではなく、町人の生活や町家の構造、名産品なども、パソコンによって学習できるようにしました。

大津百町の模型をより親しみやすく（解説機器設置）
札の辻の模型には、町人の生活風景が精密に再現されており（写真右）、それらの場面や大津宿の歴史などが検索できます。

○大津京コーナーの充実

古都大津の中心となる大津京に焦点を当て、従来の「大津京と近江国府」を「大津京」のみを紹介するコーナーとし、大津宮復原模型を、最新の発掘・研究成果をもとに改装。内裏正殿（だいりせいでん）の後ろに、内裏後殿（こうでん）の模型を新たに追加するとともに、壬申の乱の戦場となった瀬田橋の三五分一模型を制作、人形を取り入れて詳しく紹介しています。（表紙写真参照）

その他、堅田の町並み模型では、当時の琵琶湖の水運を担った「丸子船」を復原しました。

○芭蕉コーナーの設置

テーマ展示「膳所（ぜぜ）六万石」の中に「松尾芭蕉と大津」のコーナーを設置し、近江の風光をこよなく愛した俳聖・松尾芭蕉に関する資料を適宜、展示替えによって紹介します。なお大津事件についてもスペースを拡大して、関連資料をグラフィックと資料によって紹介しました。

充実した大津京コーナー
写真上はグラフィック満載の大津京コーナーの全景。
また大津宮復原模型に「内裏後殿」を新たに追加（写真下）。
最新の大津京研究の成果をもとに、分かりやすく解説しています。

○歴史年表展示の充実

二階に設置していた歴史年表展示について、大幅にグラフィックを増やし、各時代の特徴的な出来事をトピック風に取り上げ、何が大津の歴史の主要な内容かを端的に理解できるようにしました。

○新出資料の紹介コーナー

今まではスペースの関係で紹介が難しかった「新出資料」（新たに購入・受贈・受託された資料や、新たに文化財指定となったもの、新たに発見されたもの）を、タイムリーに紹介するコーナーを新設しました。

○古写真でたどる大津の歴史コーナー

昨年、市内の写真家・谷本勇氏より寄贈を受けた懐かしい古写真の数々を中心に、戦後の大津の移り変わりを紹介するコーナーを新設しました。市民の多くの皆さんの記憶に残る時代を振り返っていただきたいと思います。

○新番組「空から見た大津」の上映

一階ビデオシアター（一〇〇インチ）では、旧志賀町域を含めた市内の航空映像を新たに撮影し、約三〇分の番組として制作しました。緑豊かな旧志賀町域の風景をお楽しみください。

第61回ミニ企画展　大津の仏教文化8
日吉山王曼荼羅　拾遺
■5月29日(火)～7月8日(日)

大津市内に伝来する仏教文化に関わる文化財を紹介するシリーズ。今回は、昨秋の『天台を護る神々』展では紹介しきれなかった山王曼荼羅についての様々な文化財を展示します。

山王信仰に関する史料は、『神道大系』や『天台宗全書』などにかなりの数の史料が翻刻されているものの、その複雑で壮大な歴史を伺うにはまだまだ十分とはいえません。さらには、山王曼荼羅に直接関係する史料となるとかなり限定されています。今回は、延暦寺周辺に残る未翻刻の史料などを紹介します。また、その後の調査で所在が新たに判明した山王曼荼羅についても、展示する予定です。

日吉山王本地仏曼荼羅図
大津・乗念寺蔵　南北朝時代

本図は、釈迦三尊（釈迦如来と手前の文殊菩薩、普賢菩薩）を中心に、その周りに山王上七社の本地仏を配するという、既知の山王曼荼羅（本地仏、垂迹神ともに）の配置パターンとは異なる独自の尊像配置を持っています。現在は山王曼荼羅として伝来しますが、実際に山王であるかについては、今後の課題です。

第62回ミニ企画展
津田三蔵と大津事件
■7月10日(火)～9月2日(日)

平成十五年の企画展『大津事件』開催では、事前調査の過程で発見した津田三蔵書簡に対する反響もあり、多くの観覧者を迎えることができました。当館では、その後も継続的に事件に関する資料調査を実施していますが、今回、その後に発見された新たな資料も加え、調査の現状についての中間報告を、ミニ企画展という形で公開することにしました。明治二十四年五月十一日、京町通の小唐崎町で警備についていた巡査の津田三蔵は、突如サーベルを抜いてニコライに切りつけます。事件に対する研究は相当量の蓄積がありますが、その多くは、大審院長児島惟謙に対する司法権の独立をめぐる評価が大半を占めています。先の企画展においても、従来省みられることのなかった津田三蔵の青春時代を浮き彫りにしましたが、今回は、彼の幼年期からの資料なども加え、また事件の核心となるサーベルや血染めのハンカチなども展示するなかで、あらためて津田三蔵にとっての大津事件の意味を明らかにしようと考えています。

（会期中展示替え有り）

滋賀県指定文化財　大津事件関係資料
滋賀県立琵琶湖文化館蔵

第63回ミニ企画展　匠の技を知る

園城寺と葛川明王院の保存修理現場から

■9月4日(火)～10月21日(日)

国宝の園城寺金堂と重要文化財の葛川明王院本堂、護摩堂は、本格的な修理が現在行われています。園城寺金堂は、平成十七年の台風による被害と、前回の修復からも月日がたっていたこともあり、全面的な葺き替えとなりました。これにより、屋根裏に書かれた墨書銘の調査が進み、今まで知られていなかった情報が得られてきています。葛川明王院は、本堂と護摩堂、庵室の全面葺き替え工事が行われています。本堂は、「柿葺」で葺かれて、そのまわりに銅版で覆われていた状態でしたが、今回解体して、現状の遺構と、明王院に伝来する古文書に記された内容などから、本来は「橡葺」であったことがわかり、もともとの状態に復元することとなりました。護摩堂は柿葺きのまま修復が行われています。

このように、いま大津市内の文化財屋根葺き替え現場では、「檜皮葺」「橡葺」「柿葺」と、三つの工法により工事が行われています。本展では、このような工事現場の様子や、普段見ることができない建物の裏側などについて、実物の部品や材料、そして道具などと、写真パネルで紹介します。

園城寺金堂屋根修復風景

葛川明王院本堂屋根修復風景

常設展示室に古写真コーナーを設置しました

写真は、昭和三十八年一月、滋賀県庁あたりから琵琶湖方向を撮影した雪の日の大津市街です。中央には、滋賀県立琵琶湖文化館（昭和三十六年開館）が写っている以外、ほとんどが瓦屋根の町家ばかりです。撮影後、間もなくすると、大津中央郵便局や商工会議所など、市内中心部にあった施設が次々と打出浜埋立地に移転、今では写真の風景は一変しています。

博物館では、常設展示のリニューアルにともない、近現代のコーナーに大津市内の古写真を展示するコーナーを新たに設け、一昨年にご寄贈いただいた谷本勇氏撮影の写真のほか、昭和三十年代を中心に、市内の出来事や風景など、約三〇点を展示しました。博物館では、展示した写真以外にも、膨大な写真を所蔵し、順次ホームページや館内の検索機器で公開しています。当時の大津の風景は、見ているだけでも懐かしく、また、大津の移り変わりを感じさせてくれますので、是非ご覧になってください。なお、ご家庭でお持ちの写真がありましたら、博物館までお知らせください。

雪の日の大津市街　昭和38年1月撮影　本館蔵（谷本勇氏撮影）

学芸員のノートから

仏師快慶の晩年にあらわれる阿弥陀来迎の歩行表現について

仏師快慶の晩年やその頃（一二一〇年から二〇年代）の弟子たちの作とされる三尺（約九〇センチ）の阿弥陀立像や他の尊像の立像などをよくみていると、ある一つの表現の特色というか癖が目に付きます。それは、左足先を前に出しながら左腰は逆に引いた状態を表す表現です。実際に歩いてみるとわかるのですが、左足を出しているときは、左腰も前に出ているのが普通です。足とともに腰も前に出るのが自然なはずなのに、なぜこんな不自然な姿勢をしているのでしょうか。

実は、この快慶一派が得意とした立像の阿弥陀如来は、往生者を極楽浄土から迎えに来る、「来迎」の姿を表しているのです。前の時代までの阿弥陀如来は坐像にあらわされることが多かったのですが、わざわざお迎えに来ていただける姿を人々は求めたため、立像が流行っていきます。快慶のこの不自然な体勢も、実は迎えに来つつある姿を表しています。

つまり、左足と左腰をまず出して踏み出した後に、当然順番として右足と右腰をほぼ同時に出すことになるのですが、快慶のこれらの表現は、まさに右足を出す直前で、右腰がやや前に出た瞬間を表現しているのではないでしょうか。そして右足も前に出つつあるが、出しきっていない状態で、足が体の真下に来ている状態と思われるのです。そして、一息後にはおそらくは右腰と右足は完全に前に踏み出されることになるのでしょう。そう考えると、この不思議な表現も理解できます。まさに、往生者に向かって歩きだしている足と腰の表現なのです。

今回「比良山麓の文化財」展で展示した西岸寺像（写真）をみてみると、さらに、裳裾が地面に引きずられているように後方に寄っていることがわかります。まさに、ウエディングドレスのように、ずるずると引きずっている途中であることを実にうまく表しています。

「さすがは快慶、リアルだ」とその造像態度に感動すら覚えますが、でも実際にやってみたら生身の我々には真似の出来ない姿勢であることも確かです。「快慶棟梁、それはちょっとやりすぎですよ」と諭す弟子たちもなく、一番弟子の行快をはじめとして、みんなそろって踏襲していきました。

晩年の快慶が考え付いたこの表現は、参拝者からみて阿弥陀が来迎に現れた姿をリアルな臨場感とともに表すことに成功しているわけですが、このことにこだわるあまり、人体表現でもある仏像の彫刻としての不自然さが残るのは否めません。それでもあえてそうしたのは、みずからが阿弥陀の熱烈な信仰者で、極楽往生を願った快慶の「阿弥陀はこうあるべき」というこだわりだったのでしょう。そんな生真面目なところがまた、快慶のいいところで、後世の仏師に多大な影響を与えたところなのかもしれません。

（学芸員　寺島典人）

大津市歴史博物館
〒520-0037　大津市御陵町2-2　☎(077)521-2100
ホームページ　http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp